

Title	イオワース・プロゼロー 19世紀初期ロンドンの職人たちと政治 : ジョン・ガストとその時代
Sub Title	Iorwerth Prothero "Artisans politics in early nineteenth-century London : John Gast and his times"
Author	草光, 俊雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.3 (1980. 6) ,p.494(174)- 498(178)
JaLC DOI	10.14991/001.19800601-0174
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800601-0174">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800601-0174</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る SITC はどの改訂(SITC なのか、といった小さな疑問はいくつかみられるが、これらの点は、明治以降の貿易と国際収支を原データに基づいて整合的な統計を作成し、それを経済発展の中に正しく位置づけて分析した業績の前には、全く問題にならない。

#### 参考文献

- 岩崎恵弘、小浜裕久「一次産品貿易と海運市場」、  
今岡日出紀編『ASEAN 諸国輸出一次産品の需  
給構造』、アジア経済研究所、1980年。  
大川一司、南亮進編『近代日本の経済発展』東洋経  
済新報社、1975年。  
大川一司、ヘンリー・ロソフスキー『日本の経済成  
長』、東洋経済新報社、1973年。  
篠原三代平『鉄工業』(“長期経済統計”第10巻)、東洋  
経済新報社、1972年。  
山本有造「国際収支の長期変動」、大川・南(1975)、  
63~86ページ。  
山沢逸平「工業成長と貿易構造」、大川・南(1975)、  
87~112ページ。  
行沢健三、前田昇三『日本貿易の長期統計』、同朋  
舎、1978年。  
〔東洋経済新報社、1979年、B5判、267+xxページ、8500円〕

小 浜 裕 久

(国際開発センター研究員)

イオワース・プロゼロー

#### 『19世紀初期ロンドンの職人たちと 政治——ジョン・ガストとその時代』

Iorwerth Prothero "Artisans & Politics in  
early nineteenth-century London: John  
Gast and his times", Dawson, 1979, £15.

ここで紹介する『職人たちと政治』の著者 I. Prothero は、E. P. Thompson, E. J. Hobsbawm らの影響の中で育ってきた多くの優秀な歴史家たち(ギャレス・ステドマン・ジョーンズ Gareth Stedman Jones, ジョン・フォスター John Foster など日本では広く知られている筈)の代表格で、これまでに *Economic History Review, Past and Present* 等に切れの鋭い論文(特にロンドンのチャーティズムに関するもの)を発表してきている。彼の著書は長らく待望されていたもので、確かにその期待を裏切らない美事に分析・整理された19世紀初期のロンドンの職人たちの政治運動・組合運動の叙述は英国労働運動史に限らず、広くヨーロッパ、或いは日本の労働運動を研究している人々にとって、一つの模範となるものである。特に彼の資料の扱い方は目を見張るばかりで、実に広く、深く資料を探索しており、E. P. トムソンは、その書評の中で「ガストの死亡追悼記事をどの新聞にも見つけることができなかった、とプロゼローが知っているが、もしそうなら、それが将来見つかることはないといってさしつかえない」という程、彼の資料精通ぶりに信頼を置いている。次から次へと現われては消えていった労働組合・政治団体・協同組合等の機関紙を追跡し、内務省等の膨大な資料を駆使して調べあげられた本書は、トムソンの『イギリス労働者階級の形成』(彼のカバーした時代に続くという意味でも)に続く労作であり、比較的良書に乏しいこの時代(1810~40年代)を研究する者にとってきわめて有益な出発点をなす将来の基礎文献となるに違いない(巻末の注並びに文献解題は非常に便利である)。

本書は、いってみれば二つの目標をもって書かれた本である。副題が示すように、一つは急進的活動家船大工ジョン・ガストの組合運動、政治運動に於ける活躍を追い、彼の果たした役割を明らかにすること、そして第二に、彼の活動を通して、彼が代表していたロンドン全体の職人たちの闘い、政治・職業意識を浮きぼ

注(12) 本書では1970年までのデータが分析対象となっているので、少なくとも1度 SITC は改訂されている。

りにし、彼らが時代の荒波の中でどのように苦闘し、先進的な労働運動を切り開いていったかを、ナポレオン戦争終結後の困難な時代からチャーティスト運動に到る迄緻密に追跡し、労働運動史の中に位置づけること、である。

前述したように、本書が対象としているガスト、そして彼の職業である造船工、更には19世紀の急進的運動の担い手であった多くの人々は職人<sup>ワーカー</sup>たちであった。彼らは決して大工業発展の中で工場労働者として働いたものではなかった。古い伝統的な技能を受け継ぎ、それを誇りに思い自らの社会的地位・技術を絶えず維持しようと努力した一群の労働者である。彼らは工場労働者とも、他の未熟練工たちとも自らを区別し、多くの場合自ら自身の組織(共済組合、友愛組合、労働組合)を持ち、慈善を拒否し、独立を何よりも大切に思い、その為の倫理的信条を保持し、節酒、節制を自らに課し、よく読み、よく議論を好むリスペクタブルな人々であった。こうした彼らの社会的・経済的基盤の上に長年つちかわれてきた職業意識が、19世紀初期の急進派の運動の中で何故職人たちが圧倒的な多数を占め、何故彼らが「一見」保守的と思われる立場とは正反対に、過激な行動にまでつきすすまざるを得なかったか、という課題を解くカギであるとプロゼローは一貫して主張している。そして何故この時代が職人たちの闘いにとって画期的であったのか、という解答もそこにある。それは様々な闘いの坐折・敗北・東の間の勝利等々からイギリスの労働運動が新しい展望と方向性を確得し、確実にしていったという画期性であり、それに果たした役割に占める職人たちの貢献は計り知れないのである。

ロンドンはまさにこの職人たちの都(the Athens of the artisan)であった。1815年の統計によると、150もの様々な職業がロンドンに存在し、上流階級向けの広範囲にわたる奢侈・高級品産業、そして、首都に流れ込み定着してきた大多数のマスに供給する為のありとあらゆる職業に従事する職人たちが生活を営んでいた。それらの多くは古い、しっかりと定着した伝統的な職業であり、機械化の波をまだうけず、高度の熟練を要し、概ね比較的小規模で地域毎に集中している、という特徴を有していた。1831年のセンサスによると靴・長靴職人16,500人、仕立業14,500人、大工・建具職13,000人、1841年にはこの順位はかわらず、それぞれ22,500人、18,500人、17,000人という多くの職人たちがおり、その他30種以上の職業も1,000

人以上それぞれの職に従事している。ちなみに、横山源之助『日本の下層社会』中の「職人社会」を参照されたい。1,000戸以上ある職業として大工・左官、桶、木挽、機織がトップ5を占めており(東京府下)、500戸以上の職の中に和服裁縫、建具、足袋、指物、石工などあることから見れば、ロンドンの職人たちと江戸・東京の職人たちとの比較は非常に意義あることと思われる(その気質、政治意識等含めて)。この層に属する労働者たちは、19世紀後半以降も減ることなく増加する傾向にあり、労働貴族の問題にも絡ながら重要性は顕著となる(この期間の研究については、Gareth Stedman Jones の名著 *Outcasts London: A Study in the Relationship between Classes in Victorian Society* Oxford, 1971, Peregrine Books 1976 を参照されたい)。マルクスが描いた大工業は、実は彼が資本論を書いている時でさえ、一般化された英国産業の姿ではなかった。木綿・毛織物等のテクスタイル産業を例外として、英国の工業化が19世紀後半にいたるまで職人的伝統を維持したワークショップによって多くの手工業の集積されたものとして発展してきたことはRaphael Samuel が *History Workshop Journal* 第3号で見事に描き出している。

職人たちが一つの階層として、同質の職業意識を有し、同じ価値基盤を共有していたことはプロゼローが繰り返し強調するところであるが、果してどこまでそれが一般化されるか、というのがこの時代の労働運動史・社会史を研究するもの大きな難問である。熟練職人と不熟練職人相互の関係、またこうした伝統的職能を有しない大多数の労働者たちとプロゼローの描くエリート職人たちとの関係、等々、本書は必ずしも満足のいく解答を与えているとはいえない。ガストの職業であった造船業をとってみてもその内部には、すでに19世紀初めに、明確な階層序列が存在し、ガストとその支持者がリスペクタブルな職人であったとしても、他の同じ職業に働く労働者たちがいったいそれらに対してどう反応し、ガストらの指導する組合・政治運動にどう対応していったのかという観点が欠落してしまし、というDavid R. Wilsonの批判は、たしかに的を射ているといえるだろう(彼の本書に対する評、*Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, no. 39, Autumn 1979, p. 102.)。しかしながら、次の点も忘れてはならない。たとえ、リスペクタブルな職人たちが他と自らを敢然と区別するエリート階層に属するとはいえ、彼らの急進的な思想、行動は彼ら

が職人階層に所属しているという自覚の上に立ってはいじめて意義を持っていくことで、彼らがそれを鋭く感受し、時代の波の中で、労働者階級全体の闘いの方向性を打ち出していったカギとなるのは、彼らがまさしくエリート職人であったからに他ならない。

次に、何故彼らは急進化したのか、一体何が彼らの危機感を高め、労働の組織化に突き進んでいく原因を与えたのかを考えてみなければならない。第一は経済的諸問題、第二には政治的問題である。

職人たちが彼らの技能、そして自らの職業に誇りを持ち、それが一つの気質を成していたことは前述したが、もしそれらが失われるとすれば、それは彼らの誇りをいやがうえでも傷つけることになる。失業しても絶対に救貧院の世話にはならないというプライド、そしてそれらを保障するものとして彼らは様々な組織とそのネットワークを作りだした。Tramping という遍歴制度は、一地域で失業した職人たちが他の地域で職を得ることを可能にしたし、その他 benefit societies, friendly societies は病災、葬式等の費用を各組合員の積み立て金によってまかなうという役割を果たし、更にストライクの時の援助金をそこから引き出すという性格を持つようになり、労働組合の原型となる。そして、徒弟制度という職場でのヒエラルキーを設け、技能習得の為の見習い期間を厳格に定め、徒弟——ジャーニーマン——親方という秩序を強化することによって、不熟練工の侵入を防がねばならなかった。しかし、このシステムはそう安易に維持しうるものではなく、親方たち、特に多くの職人・小親方をかかえる資本家たちは、常に不熟練工・徒弟を導入することによって、熟練工たちの仕事を減らし賃金の低下を計ろうとした。この労働の稀薄化 dilution は誇り高き職人たちをして最も戦闘的な闘いを繰り広げさせることになる。そこには彼らの生活と誇り（経済と価値体系）の存続がかかっていたのである。1813年議会での徒弟制度の改悪案に対する反対は職人たちの団結を促し、連帯する親方と議員とに対し果敢な波状攻撃をかけ、それは極めて職人たちの意気を高めた。この法案は結局議会を通過したが、この闘いと敗北は、ナポレオン戦争終結（1815年）前のできごとで、戦争後におそいかる不況の波の中で職人たちの苦しい闘いを予知するものであった。

不・未熟練工の導入とともに職人たちをおびやかしたものに機械・新技術の導入がある。実際これらは相互に密接に関連している。テクスタイル産業を除き、

機械化の波は必ずしも工場制生産をともなったわけではなく、特にロンドンでは、例えば造船業にみられるように動力の旋盤・カンナ等の比較的熟練削減的效果を有する道具の改良が主で、それによって生ずる分業の発生、船大工たちのオール・ラウンドな技能の退化をねらったものであった。

さて、こうした様々な職場における労働・そしてその誇りにかけられた攻撃・打撃は、戦争終結後に生じた不況の中で敵しさを増大させ、職人たちは死にもぐるいの抵抗を余儀なくさせられる。最大の問題は剰余労働であった。戦争中の好況（造船の場合、自明のことだが、軍用船の建造などによる雇用の増大）期には労働力市場での需要が増加したのだが、そうした戦時下の好況が一旦終了すると多くの仕事にあふれた職人たちが生み出される。さらに産業全体として、外国品との競争が増大するとともに、資本主義的生産が様々な産業で進展する（例えば Northampton の製靴産業は分業を導入した廉価な大量の輸出用の靴を生産しはじめる）。これら対外輸出に重きを置く産業にとって徒弟制度は障害でしかなくなってしまう。こうした攻撃に対して、エリート職人たちは、もはや徒弟制度維持という方針だけでは闘っていけないことを自覚するにいたる。それは1810年代の段階ではすべての未熟練労働者を含む闘いにまでは到らないが、各職業間の組合の連帯という形をとりはじめる。賃上げの為の要求（自らの技能、社会的地位に見合った賃金）をかかげガストの指導によって設立された「博愛的ヘラクレス団」Philanthropic Hercules はまさにロンドンの各職種をとりまとめようという試みのはしりであった。そしてこの同一職種内の職業意識のカベを超えた職人全体の団結・連帯感の意識の形成を目ざす運動が、次から次へと生まれる。それは、経済的な問題にとどまることなく、政治的問題に対する労働の団結という姿をとるようになる。

さて、以上概観してきたように、ロンドンの職人たちはその伝統的職業意識を強固に保持しながら、次第に経済的変動の中で幅の広い連帯行動を追求するようになり、そこでトムソンの描いたイギリス・ジャコバン急進派たちの継承者として政治運動の表舞台に再び登場する。本書は、いってみればこの政治的急進主義の歴史でもあり、そのユニークな点は絶えずその担い手であったリスベクタブルな職人たちの利害に焦点をあて、そこから彼らの急進化していった原因を明確にしていったことにある。冒頭にも述べたように、可能

な限りのソースを自家薬籠中のものにしなが、一つ一つの事件を追っていくプロセローの手腕は見事という他はない。ロンドンのスパ・フィールド (1816年) からマンチェスターのピータールー (1819年) を経て、ケイト通り事件 (1820年)、そして 20~21 年のキャロライン女王をめぐるアジテーションに到る様々な闘いは、労働者自身の組織内部に「改良」と「革命」の、穏健派と急進派の対立を含みながら、彼らの利益をどのように達成するかという問題を政治参政権ならびに課税の不公平をめぐる闘いを中心に、労働者のみならず、彼らに「同情的な」議員たちをもまきこんで複雑に展開した。それは更にはロンドンの闘いと地方の闘いを如何に有機的に連結させるか、という困難だが重要な課題をもかけ、時には不認可の、時には認可された新聞を有効な宣伝、扇動の手段として幅広い連帯を旨とした闘いでもあり、同時に権力側が、労働者内部の密告者を使い、或いは近衛兵などの軍隊を出動させながら、弾圧の強化を試みようとした時期であった。

この時期のポピュラー・ラディカリズムの主人公たちはフランス革命後のロンドンラディカリズムのいわば主役・長老的存在のフランシス・ブレイスをはじめガスト、トマス・スペンス、ヘンリー・ハント、ジェイムス・ワトソン、アーサー・シスルウッド、トマス・プレストン、ウィリアム・ロヴェット、ヘンリー・ヘザリントン、リチャード・カーライル、ウィリアム・ベンボウ等々、それぞれ仕立職人、靴職人、大工、印刷工などの職人たちであり、プロセローの主張する、ラディカル・アーティザンの代表的メンバーである。しかし、彼らが政治運動指導者たちであり、同時に、誇り高い職人氣質の持主たちであったという点を共通にする一方、微妙な政治に対する考えの相違がその戦術に反映され、あるものはある時点で表舞台から身をひき、あるものは一躍立役者となるといった事態がくりかえされる。ここでプロセローがいていねいに追跡している職人たちの集会 (たいていはパブで開かれ、後にコーヒー・ハウスに移る場合が多い。当局の圧力で様々なパブを転々と移動するラディカルたちの動きも詳細に追われている) の模様等を詳しくとりあげる余裕はないが、政府当局の弾圧の強化していく中で、労働側のあせりがテロリズムに進展していくケース (ケイト通り「陰謀」事件)、そして一方キャロライン女王事件 (悪名高いジョージ 4 世の妻で、彼の王位就任以前から別居させられ、フランスに滞在していた彼女がジョージ 3 世の葬祭の為に帰

国するとともにジョージ 4 世の彼女への仕打ちから国内の同情は彼女に集まり、プロウアム卿などウィッグ党の反王党派の策謀も加わり、女王を支持する大規模な運動が熱を得たように湧き起った) のように、一見大衆の直接の利益とは無縁の反国王ジョージ 4 世的感情にその「かわいそうな」女王キャロラインへの同情の加わったきわめて異色な運動が繰り上げられるケース (そこで勿論権力との対立を労働者たちは肌で知るのだが) など、実に興味深い。特に後者のキャンペーンを再構成するプロセローの筆は全く素晴らしく、絶賛に値する。

この戦後の急進派たちの政治活動は、一見、キャロライン女王事件以後下火になる。しかしそれは、あくまでも「一見」であり、著者は様々な職人たちの他の分野 (協同組合、教育運動等) での活躍を調べながら、組合・政治運動での指導者たちが、ここでもやはり重要なリーダーたちであったことを明らかにしている。20年代初頭 (25年迄) は戦後の不況が一たん立ち直りを見せ、失業は減少し、職人たちは一転して有利な立場にたった。彼らは戦後の激しい政治運動から労働組合運動に再び力を注ぎながら地道な分野での活動を展開した。職工学校 (Mechanics' Institution) の設立、啓蒙的な新聞の発行などが主に F. ブレイスなどのイニシアチブの下で行われた。これらは必ずしも完全に成功したとはいいがたいのだが、それでも職人たちの知識に対する飢えの強さをよく示しており、また彼らの「慈善を拒否し、権利を要求する」態度から出た働くものの正当な権利としての教育が主張されたのであった。又これらをめぐり、マルサスの経済学に対する不信感・反発が強まり、彼らが自分たちの立っている根本的な土台のレベルでの経・体験、知恵によって強力な説得力のある反論を展開しているのは実に興味深い。富を作り出す者としての自覚・誇りがその富の不平等な分配、あるいはマルサスの労働者移民論などに対する強い反論を生み出すのである。

さて、25年迄の好況の次には深刻な不況の時代がやってくる。労働者たちは再び辛い闘いを余儀なくされる。スピタルフィールドの絹織物工、靴職、仕立職といった職業に従事する職人たちは職獲得の競争と低賃金の為にきわめて厳しい状態に追い込まれた。ロンドンでは地方との競争、安い外国品との競争、そして技術革新の進展の中で完全な弱点を見せはじめ、労働の側は再び新たな全国的、全産業を従えた労働組合の重要性を認識した。また、それと同時に新しい型の活動が模索されだした。協同組合運動である。ここでも

ロバート・オーウェンに短絡的に結びつけられがちな協同組合を、職人たちの主導する一種の失業救済の為の積極的な運動として捉えることによって、プロゼローは彼の一貫した主張を繰り返しているのが注目される。

30年代に入ると、急進主義が議会改革の為の闘いとともに復活し、全国労働者階級連合 National Union of the Working Classes (1831) 或いは合同労働組合 Consolidated Trades' Union (1834) の設立等を中心に、労働者の利益を守る為の組織が種々の新聞発行(特にヘザリントンの主宰する *Poor Man's Guardian* の持つ意義は大きい)をともないながら盛り上がり、ミドル・クラスと自らを峻別しながら、また34年の仕立職人たちの大規模なストライクに見られる組合運動を起ししながら、チャーティズムの時代へと移っていくのである。30年代の闘いは15年の間、職人たちが蓄積してきた戦術、理論がより鋭さをましたそれであった。例えば労働者教育は、社会的・政治的解放の為のものでなければならない、という明確な意識をもって遂行され、特に労働者連盟 Working Men's Association は、それを強力に押しすすめた。

しかしながら、チャーティズムの盛り上がる直前の1837年11月、この書の主人公ジョン・ガストは65年の生涯を終えた。この書評では彼個人に焦点をあてることはできなかったが、ここで紹介したロンドンのリスペクタブルな職人たちの闘いは、ガストが身を投じて参加してきたものであった。彼は、プロゼローによ

れば、その典型的な闘士であった。船大工という自分の職能に生涯誇りを持ち、その誇りを守る為に闘いつづけたガストは決して例外的存在であったのではなく、それが一般的な姿であったのだと著者が主張する時、読者は彼の提供する豊富な資料と証拠の洪水の中で大きくうなづくにちがいない。多くの問題が残っていることはいうまでもない。しかし、それはここで美事に再構成された熟練職人たちの像は今後のイギリス労働史の中で新たな問題を提示するという意味である。われわれは、もはや「労働者階級」というカテゴリーのみでは労働運動を分析することができないことは、既に19世紀後半の「労働貴族」の論争に関する蓄積を持つ。19世紀前半においても、それがされねばならないことは、プロゼローの研究が如実に示している。労働者の上層に属していたからといって、彼らが保守であったのではなく、かえって彼らこそが急進化しえたことはすでに述べた。経済決定論、あるいは又ウェッブ的組合史に陥ることを絶えずいましめながら、職人たちのおかれた社会的状況の中で、政治と経済の相互作用と独自性に注意を払いつつ慎重に叙述を展開していくこの書の価値はきわめて高い。この評の冒頭に述べた意見はくりかえさない。是非手にとって読まれることをおすすめする(彼の英語はきれ味のよい、学問的叙述の見本である)。

草光俊雄

(慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程・在ロンドン)